
義勇兵

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義勇兵

【Nコード】

N2566P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

日中戦争の下においてアメリカからの義勇軍、国民党の将校が語り合うことは何か。そして日本軍のパイロットが見たものは。フライングタイガースを扱った作品です。当時の三国のそれぞれの人物を書いてみました。

第一章

義勇兵

日中戦争は泥沼化していた。その中にアメリカは義勇軍として多くのパイロット達を送り込んでいた。

所謂フライングタイガーである。国民党政府を助ける為にアメリカが送り込んだ軍人達である。この時はまだ日本との完全な戦争状態になることを避ける為にだ。あえて義勇軍としたのである。

彼等は重慶に迫る日本軍の航空機と戦っていた。その中でだ。日本軍の戦闘機である隼に乗る者達はだ。そのことに気付いたのである。

「あの、今回の敵ですけど」

「パイロットが」

彼等はだ。基地に戻ってから怪訝な顔で話をした。まずは自分達が見たものを否定しようとしていた。

「顔が違いましたよ」

「あれは亜細亜人の顔じゃないですよ」

「あつちの顔でしたよ」

「ああ、御前等も見たか」

隊長の一人が部下達の怪訝な言葉に伝えて言った。

「俺もだ。あれは絶対に」

「ええ、亜米利加人です」

「ヤンキーです、間違いありません」

「あの顔は」

「何で亜米利加の奴等がいるんだ？」

彼等は怪訝な顔で話す。これは至って政治的な理由からだった。

その理由により彼等である。公式でないにしろアメリカ人達とも戦うことになったのである。そしてフライングタイガースの面々もだ。

「ジャップの奴等かなり驚いていたな」

「ああ、侵略者共のあの顔」

「かなり笑えたな」

「全くだ」

基地のバーで酒を楽しみながらの話だった。酒はバーボンと老酒がある。木造の粗末な、それでもアメリカ風のそのバーの中でだ。円卓を囲んで話していた。

「さて、じゃあ明日も戦うか」

「中国の人達の為に侵略者達を倒すぜ」

「ああ、やってやろうぜ」

「しかしな」

ここで一人の男が言った。緑の目にブロンドの髪の毛の背の高い男だ。鼻が高く赤らみ気味の顔だ。髪は丁寧後ろに撫で付けている。

その彼がだ。こつ仲間達に言うのだった。

「強かったな」

「ジャップのパイロットがか」

「強かったか」

「ああ、強かった」

こつ言うのであった。

「それもかなりな」

「そついえば動きはよかったな」

「ああ、腕もいいしな」

「戦闘機の性能もな」

「馬鹿にならなかつたな」

仲間達も彼の話を聞いてだ。酒を飲む手を止めたうえでだ。こつ口々に話した。つまみにしているひまわりの種を食べる手も止まっている。

「思いの他強かつたな」

「案外以上にな」

「ドイツのパイロットと比べて弱いつて聞いてたんだがな」

「手強い奴が多いな」

「だからだ。油断できないな」

彼は真剣な顔でまた話した。

「この相手はな」

「ああ、それじゃあエドガーよ」

「いいか、スコット大尉」

彼等はその真面目な顔でだ。彼の名前を呼びながら話した。

「あんたも気をつけろよ」

「撃墜されたらそれで終わりだからな」

「それはな」

「わかっている」

その彼エドガー。スコットは真面目な顔で頷いた。

「日本人は強い。それは胆に命じておくさ」

「ああ、俺達もな」

「それは頭に入れておくか」

こんな話をしながらだった。彼等はこれからのことを考えていた。スコットは酒が終わると一旦外に涼みに出た。するとそこに国民党軍の将校の服を来た男が来た。黒い髪を短く刈って目が少し吊り上がっている。唇は薄く背はスコットより少し低い程度である。その彼が飄々とした足取りで来たのである。

「スコット大尉ですか？」

「貴方は確か」

スコットは覚えてたの中国語で返した。しかしその将校はだ。気配りからか英語で返してきた。中国語、それも上海訛りが見られる英語であった。

「はい、劉白邦です」

「そう、ミスター劉でしたね」

スコットも彼の言葉を受けて英語で返した。

第二章

「そうでした」

「階級は大尉です」

その将校劉は自分の階級も述べてきた。ここで少し悪戯っぽい動作で敬礼もしてみせてきた。

「あらためて宜しく御願います」

「はい、こちらこそ」

スコットも敬礼で返す。そのうえで夜の滑走路の端でだ。二人で話すのであった。

話すのは当然戦いのことだ。スコットは日本軍のパイロットについて話した。それはアメリカから来た仲間達と同じ内容であった。

「日本軍は強いですね」

「ええ、あの強さは桁外れです」

劉は少し苦い顔で述べた。

「全く以て」

「はい、どうやらかなり激しい戦いになりそうですね」

「我々もこれまでかなりやられてきています」

劉の顔がさらに苦いものになる。

「それで今こうしてここまで追い詰められています」

「左様ですか」

「しかしそれでもです」

劉はここでだ。スコットの顔を見て述べた。

「貴方達が来てくれましたから」

「我々がですか」

「頼りにしています。そして」

「そして？」

「我々も意地を見せますよ」

ここでは笑顔になった。そのうえでの言葉だった。

「中国人の意地を」

「意地をですか」

「これでも中国はこうした試練を幾度も経験しています」

「長い歴史の中で、ですね」

「しかし今も生きています。ですから」

「戦いますか」

「最後の最後まで戦います」

こう話すのだった。

「何があるうとも」

「そうですね。では我々も」

「貴方達もですか」

「共に戦わさせてもらいます」

劉への言葉である。

「是非共」

「だからここにおられるのですね」

「はい」

劉の今の言葉にもこくりと頷く。

「その通りです」

「では。これからも」

「宜しく御願います」

スコットからだった。右手を差し出したのだった。

「どうか」

「ええ、こちらこそ」

劉は微笑んでだった。彼も右手を出した。

そうしてそのうえで握手をし合いだ。また言い合う。

「共に戦いましょう」

「中国の為に」

笑顔で言い合うのだった。そして日本軍の基地ではだ。眉が吊り上がった厳しい顔の小柄な男がだ。威勢のいい声でこう言っていた。
「アメ公が来たたら来たらでいい」

「来たらその時はか」

「どうするんだ？」

「見敵必殺だ」

日本軍人に相応しい言葉であつた。

「それ以外に何がある」

「そうだな」

「それしかないな」

同僚達もだ。その彼の言葉に頷く。今彼等は下は軍服のズボンだが上はシャツだけだつた。そのうえで粗末な隊舎の中で話していた。

「やっぱりな」

「戦うしかない」

「どんな敵でも」

「ここで負ければ後がない」

彼はまた言った。

「そう思つて常に戦つ。それだけだ」

「話は聞いた」

その彼の後ろからだ。声がしてきた。

第三章

「河原崎重吉中尉」

「はい」

その彼河原崎重吉はだ。その言葉を聞いて振り返りだ。そのうえで応えるのだった。

「司令、こちらに来られたのですか」

「話を聞いてな」

厳しい顔のイガグリ頭の男だった。帝国陸軍の軍服は大佐のものである。その彼が来てだ。そのうえで彼に対して言ってきた。

「それでだ」

「左様でしたか」

「次の出撃の時にはだ」

司令は河原崎を見てだ。そのうえでまた声をかける。

「頼むぞ」

「わかっています」

敬礼と共に頷く彼だった。

そしてだ。次の出撃の時だ。

スコットは飛行服を着てそのうえでだ。カーチスP40に乗っていた。そしてそのうえで、である。滑走路にいる劉に対して声をかけた。

見れば彼は整備点検の指揮にあたっていた。その彼に声をかけたのである。

「では今から」

「はい、それでは」

二人は顔を見合わせてだ。そのうえでまた話す。

「行って来ます」

「健闘を祈ります」

二人は英語で話していた。スコットはそ中で言うのであった。

「日本軍もしぶといですね」

「存外に」

劉もそれを話す。

「劣勢になればなる程粘りを見せます」

「普段あれだけ闘争心を見せてそのうえですか」

「はい、敵がどれだけ多くても退きません」

それもまた日本軍だった。実際に中国戦線では二十万の大軍を僅か一万で破ったこともあるし何倍もの大軍と常に渡り合ってきたのである。

劉はその日本軍を知っていた。だからこそその言葉だった。

「だからこの戦闘機もです」

「念入りに整備して下さったのですね」

「私は飛べません」

「ここでも言うのだった。」

「ですから。その分です」

「整備をして下さったのですね」

「絶対に故障はしません」

劉は断言した。

「そして性能を完全に引き出しています」

「では私はその戦闘機で」

スコットはそのP40を見ていた。その機首がやや大きい独特のシルエットの機体を見ながらだ。彼は意を決して言うのであった。

「戦います」

「健闘を祈ります」

「それでは」

二人で敬礼をし合ってた。そのうえで出撃する。重慶上空に行くのだ。もう日本軍が来ていた。すぐに彼等との戦闘に入る。

「いいか」

スコットが部下達に指示を出す。

「一機ずつ戦うな」

「常に編隊で、ですか」

「そうしてですね」

「そうだ、敵を侮るな」

これを強く言うのである。

「甘く見たらやられるのはこっちだ」

「だからこそですか」

「ここは」

「そうだ、絶対に一機になるな」

彼はまた言った。目の前にいるその日本軍の隼達を見てである。

「わかったな。それならだ」

「了解です」

「それならです」

「行きますよう」

こうしてだった。日本軍の戦闘機隊に向かう。そしてだ。

河原崎もだ。そのP40の編隊を見てだ。部下達に告げる。

「編隊で戦う」

「はい」

「そうしてですね」

「敵は強いぞ」

彼もであった。奇しくもスコットと同じことを話していた。

第四章

「絶対に油断するな」

「油断すればこっちがやられますね」

「撃ち落とされますね」

「そんな恥をかくな」

彼は部下達に厳命する。

「絶対にだ。いいな」

「油断して倒されるのは武士の恥」

「だからこそですね」

「そういうことだ。それならだ」

こうしてだった。彼等も敵に向かう。忽ちのうちに激しい格闘戦となった。

空中でそれぞれの編隊が激しく乱舞してそのうえで互いに火を噴く。機銃の音が鳴り響きそれが敵を屠らんとする。その中でだ。

スコットはだ。己の機体を見ていた。そのうえで言うのである。

「いい性能だ」

自分の乗っている機体がだ。普段とは全く違うことに気付いたのだ。

まず動きが違う。操縦桿の動きが軽く機動性能も速度もだ。普段より出せていた。

そのうえで敵を狙う。機銃のその狙いもだ。

敵の動きは素早くそうは当たらない。しかしであった。

その反応のよさに満足する。劉の言葉は嘘ではなかった。

「大尉は本当に完全にしてくれたな」

それを確かめるのであった。

そしてだ。そのP40でだ。一機の隼を見据えた。

他の隼よりもまだ動きがいい。それを見てだった。

「いいか」

「はい」

「隊長、何でしょうか」

「あの隼は任せろ」

その隼を見ての言葉である。

「いいな、あれはだ」

「隊長がですか」

「相手をされるのですね」

「フォローは不要だ」

こつも告げる。

「それぞれの敵に向かえ。いいな」

「編隊単位で、ですね」

「このまま」

「敵もそれを崩していない」

一対一であるがそれでもだ。編隊対編隊でもある。それがわかつての言葉だった。

「それならだ」

「わかりました、それなら」

「それで」

部下達もそれに頷いた。こつしてだった。

スコットはその隼に向かった。そのうえで機銃を撃つ。だがそれはあっさりとかわされた。隼は身軽に右に動いて上からのそれをかわしたのだ。

「くつ、やる！」

「あのカーチス」

その隼に乗っていた河原崎がだ。ここで言う。

「やけに強いな。ここはだ」

「隊長！」

「大丈夫ですか？」

「ああ、任せろ」

彼もまたこつ言うのだった。

「ここはだ」

「そうですか」

「このままですね」

「そうだ、任せろ」

また言う彼だった。

「俺一人でやる。いいな」

「了解です」

「それでは」

「しかしだ」

ここでもだ。スコットと同じことを告げるのだった。

「編隊は崩すな」

「それはですね」

「決して」

「そうだ、崩すな」

また部下達に命じる。

「わかったな」

「了解です」

「それではこのまま」

「編隊で向かえ」

こうしてであった。全員で敵の編隊を迎え撃つ。

しかしである。ここでだ。

河原崎は実質的にスコットとの一騎打ちに入っていた。互いに旋回し合い犬の鬨いの如く狙い合う。その中でだった。

攻撃もし合うがそれでもだった。攻撃は避けられていくのだった。

第五章

「くっ、何だこいつ」

「手強いか」

河原崎もスコットもお互い言う。

「フライングタイガースにこんな奴がいるのか」

「日本軍、強いか」

「ならぬ。それでもな」

「撃墜してやる」

お互いに言葉を交えさせてはいない。しかしそれでもだ。

激しく闘いだ。お互いを倒そうとしていた。

空中でドッグファイトを続けていく。だが互いに決定打を欠き撃墜できない。

そしてだ。河原崎は通信を受けた。

「おい、もう帰るぞ」

「撤収ですか」

「そうだ、時間だ」

だからだというのである。

「もうな。帰るぞ」

「わかりました、それなら」

「あっさりとしているな」

通信を入れている上司はこう彼に言うのだった。

「それはまた」

「そうでしょうか」

「まあいい。とにかく今は帰るぞ」

「はい」

ここはあっさりとスコットのP40から離れてだ。そのうえで重慶上空から姿を消す。後に残ったのはスコット達義勇軍だった。

スコットはすぐにだ。部下達に通信を入れた。そうして問うこと

はだ。

「皆いるか」

「はい、います」

「大丈夫です」

「生きています」

「そうか、ならいい」

彼は部下達のその言葉を受けてまずは納得して頷いた。

「それならな」

「部隊全体でもそれ程損害は受けていません」

「撃墜された機体は二機です」

「それも全員脱出に成功しています」

「そうか、それならいい」

報告を受けたスコットは満足した。無事だと聞いてだ。

そしてだ。その彼にまた報告が来た。

「ただ、日本軍も損害は大きくありません」

「撃墜できた機体は二機です」

「それだけです」

「二対二か」

スコットはその数を聞いてだ。難しい顔で述べた。

「それはまたな」

「残念ですが引き分けかと」

「元々も数も互角でしたし」

「結果として」

「そうだな。引き分けだな」

スコットはその難しい顔で頷いた。

「それではな」

「それに向こうも脱出しましたし」

「今国民党軍が捕虜にしに向かっています」

「情報は手に入れられそうです」

「わかった」

このことには満足した。やはり情報は有り難い。

何はともあれ戦いは終わった。そしてスコットは捕虜から得たという情報を聞いてだ。そのうえでこう話すのだった。

「河原崎中尉か」

「それが敵の部隊のエースらしいです」

「その男がです」

「間違いないな」

彼はまた酒を飲んでいた。そこで部下達とその酒を酌み交わしながら話を聞いてだ。そのうえで確信したのである。

「俺が戦った奴はそいつだ」

「それがその河原崎ですか」

「その男ですか」

「絶対にそうだ」

彼はまた話した。

「あいつがそうだ。動きが他の奴とは違っていた」

「そいつが一番手強いですね」

「やはり」

「ああ、手強い」

また話す彼だった。彼は強敵が出て来たことを感じていた。

第六章

そしてである。彼は劉には礼を述べた。整備のことをだ。

「どうも。お陰で最高のファイトができました」

「最高のですか」

「はい、それができました」

微笑んでこう述べたのである。

「敵の隼に全く引けを取りませんでした」

「私達ができるのはこれだけです」

劉はその彼の言葉に少し微笑んで述べた。

「ですから」

「だからですか」

「戦争は自分ができる最善のことをやる」

劉は言った。

「そうでないと勝てませんから」

「だからですか」

「はい、だからです」

また言うのであった。

「私もまたそうしているだけです」

「そして最後には日本をです」

「絶対に中国から叩き出しましょう」

普段は冷静な劉だが今はだ。こう言うのであった。右手は自然と力瘤になっている。

「そして勝利を掴み取りましょう」

「はい、是非」

「勝利を」

こう話してであった。彼等は戦い続けていた。

やがて太平洋戦争になり義勇軍は解散し正式に軍に組み入れられた。戦っていることは変わらない。しかしだった。

「そうですか。これでお別れですね」

「はい、急に決まりました」

スコットはこう劉に話していた。彼等は滑走路で話している。その後ろには倉庫や格納庫が連なっている。航空基地らしい。

「それで」

「欧州戦線ですか」

「イギリスです」

そこに行くというのである。

「爆撃機の護衛で」

「それでなのです」

「また。戦ってきます」

スコットは笑顔で述べた。

「そしてです。勝ってきます」

「わかりました。それでは私もです」

劉もであった。笑顔で彼の言葉に返すのであった。

「ここで戦い、そして」

「勝たれますね」

「絶対に敗れません」

確かな言葉だった。そこには自信さえあった。

「御安心下さい、中国もまた勝ちます」

「はい、それではまた」

「御会いしましょう」

こうしてスコットは欧州に向かった。スコットは中国に残ったまま戦い続けるのだった。そして河原崎はというとだ。彼の元に辞令が届いていた。

「本土ですか」

「そうだ」

司令が彼に告げていた。今彼は司令室においてその司令の席の前に立っている。

「本土に行ってもらおう」

「本土防衛ですね」
「この前何があったか知っているな」
司令はその彼にこう問うた。
「聞いているな」
「はい、まさか爆撃機が空母から来るとは」
「しかしだ。爆撃されたのは事実だ」
司令は険しい顔で言う。
「従ってその護りを固めなければならん」
「それで私をですね」
「そういうことだ。いいな」
あらためて河原崎に対して問うた。
「戻ってもらおう」
「わかりました」
河原崎は司令のその言葉に敬礼で応えた。
「それではすぐに準備します」
「こっちの戦線は相変わらずだがな」
「重慶は中々陥落しませんか」
「空から攻めても限度がある」
司令の顔は難しいものになっていた。
「本気で陥落させたいのなら地上部隊を行かせるしかないがな」
「それが難しいですね」
「正直無理だな」
司令は言った。

第七章

「重慶まで向かわせるのはな」

「確かに。南京を陥落させたまではよかったです」

「中々難しい。蒋介石もしぶとい」

これは日本側の予想以上だった。南京を陥落させてそれで戦争は終わると思っていたところがあるのだ。しかしそうはならなかったのである。

「実にな」

「そうですね。しかし」

「しかし？」

「何か今朝騒ぎがありましたか」

河原崎はここで話を変えたのだった。

「基地の外で。何があったのですか？」

「新聞記者達が騒ぎを起こしたのだ」

「またですか」

「そうだ、住民達からものを取り幼子を手籠めにしようとしたのだ」
「そうしようとしたのである。司令はそれを実に忌々しげな顔で話していた。」

「それでだ。憲兵隊に捕まってさらに暴れていたのだ」

「呆れた話ですね」

「そんなことをするのはあの連中だけだ」

「全くです」

「新聞記者は何だ？馬賊の集まりか？」

「そうだというのである。実際に南京陥落の際等で新聞記者達のうちした行動が問題になってもいたのである。便衣兵、即ちゲリラを探し出し掃討したことを虐殺と誇張したのは後の世の新聞記者だが何故かこのことには頬かむりしている。」

「それともゴロツキか？何だ？」

「わかりません。しかし何もなかったのですね」

「幸いな。それに至る前に捕まえた」

そうされたというのだ。

「記者は後でだ。本国に移送される」

「そしてお咎めなしですね」

「軍なら間違いなく軍法会議だ」

そうならないのが新聞記者の世界であった。それが戦後長い間続いていたということが実に恐ろしい。我が国のマスメディアに自浄能力は絶無である。

「それがないのだからな」

「恐ろしい世界ですね」

「連中については気をつけろ」

司令は釘を刺した。

「ああした連中はどんな悪事でもするしな」

「わかっていきます」

河原崎は今度は頷いて答えた。

「それでは。連中にはよく気をつけます」

「若しだ。戦いが終わってだ」

司令の顔がここで曇った。

「これは空耳と聞いてくれ」

「空耳ですか」

「そうだ、空耳だ」

慎重な顔をしての言葉である。

「空耳だ」

「わかりました、空耳ですね」

「その空耳だ。我々が戦争に敗れた時奴等はだ」

「今は我等の太鼓持をしています」

「間違いなく敵に寝返る。そうした連中だ」

司令は確信していた。新聞記者とはそうした連中だ。とだ。

「そして我々に対してあることないこと書くだろう」

「かつて罵った敵に媚びたうえで、ですか」

「そうしたことをする連中だ」

また話すのであった。

「それはわかっておくことだ」

「はい」

河原崎はまさかそこまでとは思っていなかった。しかし司令の空耳は戦後見事なまでに的中することになった。そして日本最大の権力者達として君臨し世論をミスリードし特権階級を形成していく。戦後民主主義とやらは彼等に牛耳られ意のままになる民主主義なのである。

河原崎は司令の空耳を受けて本国に戻った。そのうえで彼は本土に迫る爆撃機達と戦うのだった。そしてその本土で終戦を迎えた。

終戦を迎えた彼はまずは軍を離れて故郷で農業をしていた。しかしである。

すぐにだ。警察予備隊の話を知ったのであった。

「空ですか」

「そうだ、空の方に来てくれるか」

こうかつての上官の一人から声をかけられたのである。

「貴様は最後は少佐で終わったな」

「はい」

「それならそのままだ。入られるぞ」

「そうなのですか」

終戦時は大尉だったがその終わった時の一斉昇進で少佐になったのである。

第八章

「少佐に」

「呼び方は変わるらしいがな」

その上官はこつも言い加えた。

「それは気をつけておいてくれ」

「わかりました」

「それでどうする？」

上官はあらためて彼に問うた。

「それでだ。どうする？」

「喜んで」

即答だった。

「入らせて頂きます」

「そうか、それならだ」

「はい、宜しく御願ひします」

こつして彼はその警察予備隊、そこから航空自衛隊に入った。パイロット、そして司令官として活躍しそのうえで勤務を終えた。定年してからは民間企業に入った。

定年してすぐにだった。日本の政治が大きく変わった。

「大陸とか」

「ああ、国交を結ぶらしいな」

かつての同期と飲んでいる時にだ。この話を聞いたのである。

「どうやらな」

「共産党政権のか」

「そうだ、そこそ手を結んでソ連とあたるらしいな」

「ソ連か。共産主義者と戦う為に共産主義者と手を結ぶか」

「何、難しく考える必要はない」

その同期は素っ気無く述べた。

「深刻にはな」

「敵の敵は味方か」
彼は一杯やりながら述べた。
「そういうことか」
「ああ、それだ」
「それで手を結ぶか」
「腑に落ちないか？」
同期は彼の杯に酒を注ぎながら問うた。日本酒だ。
「それは」
「そうじゃないと言えば嘘になる」
これが彼の返答だった。
「やっぱりな」
「そうか、やはり貴様はそう思うか」
「思っさ。しかしそれが政治だな」
「結論としてそうだ」
河原崎に対する言葉だ。それを告げるのだった。
「それはな」
「そうか。納得はするな」
「納得するしかないだろう。そうか、共産党とか」
「国交を結ぶ」
同期はこのことをまた話した。
「国民党とは断交になるだろうな」
「それはもう決まっているか」
「それもまた政治だ。ただ」
「ただ？」
「国民党が共産党に負けて台湾に行ったな」
話すのはこのこともだった。これは歴史的事実である。
「その前に国共合作もしていたな」
「二回な」
「それで国民党にいるが共産黨員だったのもいるしな」
「大陸にもいるか」

「いるらしいな。まあどっちにしても敵だったけれどな」

国民党も共産党も日本の敵であることには変わりがなかった。それも歴史的事実であった。彼等は互いに激しい戦いを繰り広げていたのだ。

「それでもな。今はソ連と戦うからな」

「それでか」

「ああ、それでだ。台湾とは断交するがそれでも交流は続けていくな」

こんな話をしてであった。彼等はその中国との国交樹立について考えていた。それはもう決まっていることだった。そして河原崎はこう言うのだった。

相手はその同期だ。彼は別の日に飲みながらこう同期に話したのである。

「思うところがある」

「何だ、急に」

「その中国に行ってみる」

ビールを前にしてだ。こう話したのだ。

「頃合いを見てな」

「北京にか」

「俺はあそこで戦っていたからな」

ふと言葉に郷愁が宿る。

「そこに行きたい」

「それで何処に行くんだ？」

「重慶は無理か」

かつて戦ったその街だった。

第九章

「俺はあの空で戦っていたからな」

「行きたいか」

「今どうなっているか見たい」

だからだというのだ。国交を結んだことにより行き来できるようになる、ならばそのかつて自分が戦っていたその場所を見たいというのだ。

「だからだ」

「じゃあ行くといい」

同期はそれを止めなかった。

「是非な」

「ああ、じゃあ行つて来る」

「そうしろ」

彼にビールを勧めながらのやり取りだった。そしてだ。

重慶ではだ。スコットと劉が会っていた。二人は役所にいた。そこで話をしていた。

「そうでしたか、共産党員だったのですね」

「お話していたと思いますか」

「すいません、あの時はそこまで見ていませんでした」

スコットはこう劉に話す。二人共その顔には皺が出ていて髪も白いものが混じっていた。幾分薄くもなっていて歳を感じさせるものがある。

「申し訳ありません」

「特に秘密にしていた訳ではありませんが」

劉は微笑んで述べている。スコットは今はスーツであり劉は人民服だ。今のそれぞれの姿で互いに話をしているのであった。

「そうだったのですか」

「はい、それでなのですが」

「それで？」

「如何ですか、久し振りの重慶は」
「こうスコットに問うたのである。」

「あの時は街に入ってはおられませんでしたね」

「はい、それは」

「なかつた。それはである。」

「上空で戦っていただけですから」

「では街中はかなり違いますね」

「上から見るのと全く違いますね」

「そうですね。ではこれからですが」

「はい、これからは」

「何か食べますか？」

「にこりと話してスコットに話すのだった。」

「それで」

「それで、ですか」

「ここは四川料理ですよ」

「ああ、あの辛い」

「御存知ですね」

「戦争中は殆ど食べられなくて残念でした」

スコットはその時のことを思い出して述べた。戦争の時は殆ど基地にいた。それに戦争中なのでいい食べ物はない。それでは四川料理を味わえないのも当然だった。

「ですから是非」

「お箸は使えますか？」

「一応は」

「そうだというのである。」

「使えますけれど」

「では大丈夫ですね。行きましようか」

「はい、では今から」

こう話してだった。二人は役所を出てそのうえで街に出る。重慶

の街はそれ程進んでいるものではなかった。少なくともスコットが見たあの時の中国とあまり変わってはいないように見えた。

それを見ながらだ。彼はまた話すのだった。

「思ったより変わっていませんね」

「あの時とですか」

「はい、重慶に入ったのははじめてですが」

それでもだというのだ。

「それでも」

「あの時のままですか」

「これから変わりますかね」

そしてこんなことも言うスコットだった。

「この街は」

「少なくとも変えたいとは思っています」

これが劉の言葉だった。

「そうは思っています」

「そうですね」

まだ文化大革命の嵐が吹いていないわけでもなかったのだ。それで劉も言葉は慎重だった。中国も戦争の後で色々であったのである。

第十章

「それでは今は」

「今は、ですか」

「食べましょう」

政治から話を微妙に変えた。

「その四川料理を」

「はい、それでは」

そんな話をしながら店に向かう二人だった。そしてだ。

河原崎もいた。彼は今は通訳と一緒にだ。そのうえで街を歩いている。

「ここははじめてですね」

「一応は」

少なくとも中に入ったのははじめてなのでこう通訳に答えていた。

「そうです」

「左様ですか。それでなのですが」

「はい、それで」

「これからのことですが」

こう通訳に言うのである。

「何処に行くのでしょうか」

「はい、食事も終わりましたし」

通訳はガイドも兼ねているようだ。すぐにこう返してきたのだ。た。

「それではですね」

「はい、それでは」

「重慶の街並みを見に行きますか？」

「こう言ってきたのだった。」

「今から」

「そうですか。重慶の」

「行かれたことはありませんよね」

通訳は今度はこう話すのだった。

「それではと思ひまして」

「そうですね。それではこれから」

「はい、これからですね」

「行きましよう」

二人はそのまま二人で向かう。そうしてであった。

そこにスコットと劉が前から来た。そのまま。

彼等は擦れ違った。それだけだった。

だがその時にはスコットと劉は思わず振り向いてしまった。

「？」

「あれは」

そしてだった。河原崎もだ。振り向いてしまった。

「どうされました？」

「いや、少し」

振り向いた河原崎は通訳に対して応える。振り向いたままだ。

「あの二人は」

「あの人は劉さんですね」

通訳はまずは二人のうちのアジア系の者を見て話す。

「そしてもう一人の白人は」

「御存知ですか？」

「誰かわかりませんがアメリカ人みたいですね」

そうではというのだった。

「話している言葉を聞いていますと」

「アメリカ人ですか」

「はい、中国語に英語の訛りがあります」

それでわかるというのだ。通訳ならではの言葉だった。

「ですからあれは」

「左様ですか、それでなのですか」

「その様です。しかし」

「しかし？」

「変われば変わるものですね」

通訳はこう話すのだった。河原崎に対してだ。

「これまでここに日本人やアメリカ人が来ることはなかったのに、
こうしてですから」

「時代は変われば変わりますからね」

「はい、戦争もあつて対立もあつて」

「今はこうですからね」

「本当にわからないものです」

通訳は微笑んで話す。

「全く以て」

「そうですね。しかしあの二人は」

河原崎はまだ振り向いた姿勢のままだ。そのうえでの言葉だった。

「何か以前に縁があつたような」

「縁がですか」

「会った筈がないというのに」

その自覚はあつた。しかしであつた。

「それでもそう感じるとは。不思議なものですね」

「そうですね。縁があるとすれば」

「不思議です」

河原崎は首を元に戻した。そのうえで通訳とまた話すのだった。

そしてスコットと劉もだ。振り向いたままの姿勢で話していた。

「あの日本人、ですね」

「そうですね。あれは日本語ですね」

河原崎が話しているその言葉から察したのだった。

「日本とも国交を樹立されたのですね」

「はい、そうです」

「しかし不思議ですね」

「貴方もそう思われるのですね」

「はい」

スコットはこう劉に話す。

「その通りです」

「会った筈がないというのに」

二人はいぶかしむ顔で話す。

「それがどうして」

「何処かで会った様に思えるのでしょうか」

「不思議ですね」

「全くです」

二人はこう話すのだった。

「こんなこともあるのですか」

「おかしなことです」

そうしてであった。二人でいぶかしむのであった。

二人にもわからなかった。しかしだ。

ここぞだ。劉が言ってきた。

「さて、それで」

「はい、食べにですね」

「行きましょう。あの日本人のことはとりあえず置いておいて」

「そうですね。ただ」

「そうですね」

劉はスコットのその言葉に頷いた。

「また何処かで会うかも知れませんか」

「そうですね、何処かで」

二人はこう話すのだった。そしてだ。

二人は食事に向かった。河原崎は通訳と共に街を觀に向かった。

もう戦いはなく三人は会ったことがない。しかし何故か互いに縁を感じていたのだった。それがどうしてかは三人にはわからないことだった。過去のことにも気付かないまま。

2
0
1
0
·
6
·
1
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2566p/>

義勇兵

2010年12月1日21時40分発行